

畑のへり

宮沢賢治

青空文庫

麻が刈られましたので、畑のへりに一列に植ゑられてゐたとうもろこしは、大へん立派に目立ってきました。

小さな虻あぶだのべつ甲いろのすきとほった羽虫だのみんなかはるがはる来て挨拶あいさつして行くのでした。

とうもろこしには、もう頂上にひらひらした穂が立ち、大きな縮れた葉のつけねには尖とがった青いさやができてゐました。

そして風にざわざわ鳴りました。

一疋びきかへるの蛙が刈った畑の向ふまで跳んで来て、いきなり、このとうもろこしの列を見て、びっくりして云いひました。

「おや、へんな動物が立ってゐるぞ。からだは瘡やせてひよろひよ

ろだが、ちゃんと列を組んでゐる。ことによるとこれはカマジン国の兵隊だぞ。どれ、よく見てやろう。」

そこで蛙は上等の遠めがねを出して眼めにあてました。そして大きくなつたたうもろこしのかたちをちらつと見るや蛙はぎやあと叫んで遠めがねも何もはふり出して一目散に遁にげだしました。

蛙がちやうど五百ばかりはねたときもう一ぴきの蛙がびつくりしてこつちを見てゐるのに会ひました。

「おゝい、どうしたい。いったい誰たれににらまれたんだ。」

「どうしてどうして、全くもう大変だ。カマジン国の兵隊がたうとうやって来た。みんな二ひきか三ひきぐらゐる幽霊をわきにかかへてる。その幽霊は齒が七十枚あるぞ。あの幽霊にかじられたら、

もうとてもたまらなげ。かあいさうに、麻はもうみんな食はれてしまった。みんなまつすぐな、いい若い者だったのになあ。ばりばり骨まで嚙^かじられたとは本当に人ごととも思はれんなあ。」

「何かい、兵隊が幽霊をつれて来たのかい、そんなにこはい幽霊かい。」

「どうしてどうしてまあ見るがいゝ。どの幽霊も青白い髪の毛がばしやばしやで齒が七十枚おまけに足から頭の方へ青いマントを六枚も着てゐる」

「いまどこにゐるんだ。」

「おまへのめがねで見るがいゝあすこだよ。麻ばたけの向ふ側さ。おれは眼鏡^{めがね}も何もすてて来たよ。」

あたらしい蛙は遠めがねを出して見ました。

「何だあれは幽霊でも何でもないぜ。あれはたうもろこしといふやつだ。おれは去年から知ってるよ。そんなに人が悪くない。わきに居るのは幽霊でない。みんな立派な娘さんだよ。娘さんたちはみんな緑色のマントを着てるよ。」

「緑色のマントは着てゐるさ。しかしあんなマントの着様が一体あるもんかな。足から頭の方へ逆さかさまに着てゐるんだ。それにマントを六枚も重ねて着るなんて、聞いた事も見た事もない贅ぜいたく沢だ。おごりの頂上だ。」

「ははあ、しかし世の中はさまざまだぜ。たとへば兎うさぎなんと云ふものは耳が天までとゞいてゐる。そのさきは細くなつて見えない

くらゐだ。豚なんといふものは鼻がらっぱになつてゐる。口の中にはとんぼのやうなすきとほつた羽が十枚あるよ。また人といふものを知つてゐるかね。人といふものは頭の上の方に十六本の手がついてゐる。そんなこともあるんだ。それにたうもろこしの娘さんたちの長いつやつやした髪の毛は評判なもんだ。」

「よして呉くれよ。七十枚の白い齒からつやつやした長い髪の毛がすぐ生えてゐるなんて考へても胸が悪くなる。」

「そんなことはない。まあもつとそばまで行つて見よう。おや。誰たれが行つたぞ。おいおい。あれがたつたいま云つたひとだ。ひとだ。あいつはほんたうにこはいもんだ。何をするかこゝへかくれて見てゐよう。そら、ちよつと遠めがねを貸すから。」

「あゝ、よく見える。何だ手が十六本あるつて。おれには五本ばかりしか見えないよ。あつ。あの幽霊をつかまへてるよ。」

「どれ貸してごらん、ああ、とつてるとつてる。みんながりがり
とつてるねえ。たうもろこしは恐こはがつてみんな葉をざあざあうご
かしてゐるよ。娘さんたちは髪の毛をふつて泣いてゐる。ぼくな
らちやんと十六本の手が見えるねえ。」

「どら、貸した。なるほど十六本かねえ、四本は大へん小さいな
あ。あゝあとからまた一人来た。あれは女の子だらうねえ。」

「どう、ちよつと、さうだよ。あれは女の子だよ。ほういまねえ
あの女の子がたうもろこしの娘さんの髪毛をむしつてねえ、口へ
入れてそらへ吹いたよ。するとそれがぱつと青白い火になつて燃

えあがつたよ。」

「こつちへ来るとこはいなあ、」

「来ないよ。あゝ、もう行つてしまつたよ。何か叫んでゐるやうだねえ。」

「歌つてるんだ。けれどもぼくたちよりはへただねえ。」

「へただ、ぼく少しうたつてきかしてやらうかな。ぼくうたつたらきつとびつくりしてこつちを向くねえ。」

「うたつてごらん。こつちへ来たらその葉のかげにかくれよう。」

「いゝかい、うたふよ。ぎゅつくぎゅつく。」

「向かないよ。も少し高くうたつてごらん。」

「どうもつかれて声が出ないよ。ぎゅつく。もうよさう。」

「よすかねえ。行ってしまった残念だなあ。」

「ぼくは遠めがねをとつてくる。ぢやさよなら。」

「さよなら。」

二ひきの蛙かへるは別れました。

たうもろこしはさやをなくして大変さびしくなりましたがやっぱり穂をひらひら空にうごかしてゐました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

畑のへり

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>